KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

唐古・鍵考古学ミュージアム

展示図録

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

唐古・鍵考古学ミュージアム

展示図録

凡　例

1 本書は、唐古・鍵考古学ミュージアムの常設展示の概要を解説する図録である。
2 図録の構成は、展示の構成を基本とするが、一部異なるところがある。
3 常設展示ならびに本書の作成には、多くの方々のご指導とご協力を得た。巻末に記して感謝申し上げる。
4 本書は、田原本町教育委員会　文化財保存課の藤田三郎、河森一浩が分担執筆した。

目　次

館内案内・利用案内 …… 4・5

第Ⅰ部　唐古・鍵の弥生世界

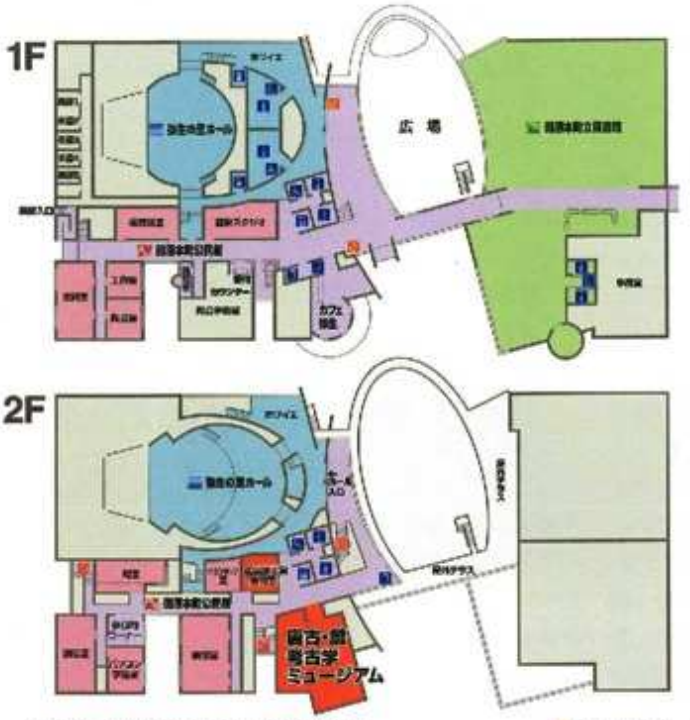
遺跡の発見と発掘調査 …… 8・9
唐古・鍵ムラの人々 …… 10
ムラをつくる …… 11～13
唐古・鍵ムラの変遷 …… 12・13
【コラムⅠ】動物・昆虫からみたムラの環境 …… 12・13
弥生の食 …… 14～16
米づくり …… 14
栽培と採集 …… 15
漁撈と狩猟 …… 16
弥生の住まい …… 17～19
さまざまな井戸 …… 18
大型建物跡 …… 19
土器をつくる …… 20～23
【コラムⅡ】実験考古学 ～弥生土器をつくる～ …… 21
形と文様 …… 22
弥生土器の編年 …… 23
木器をつくる …… 24～29
食器をつくる …… 25
農具をつくる …… 26・27
木器貯蔵穴 …… 28
【コラムⅢ】実験考古学 ～木器をつくる～ …… 29
青銅器をつくる …… 30～33
銅鐸の鋳造 …… 31
他の鋳型外枠と青銅器 …… 32
【コラムⅣ】実験考古学 ～銅鐸をつくる～ …… 33
さまざまな手仕事 …… 34～37
籠を編む …… 34
蓆を編む …… 34
糸を紡ぐ …… 35
布を織る …… 35
石を割る …… 36
石を磨く …… 36
玉を磨く …… 37
骨を磨く …… 37
交流と戦い …… 38～40
交流 …… 38・39
戦い …… 40
まつりといのり …… 41～45
絵画を描いた土器 …… 42
記号をもつ土器 …… 43
【コラムⅤ】まつりの風景 …… 44
鵜鉄鉇容器と勾玉 …… 45
死者を葬る …… 46

第Ⅱ部　田原本のあゆみ

原始 …… 48・49
旧石器・縄文時代 …… 48
弥生時代 …… 48
古墳時代 …… 49
古代 …… 50
中世 …… 51
近世 …… 52・53
陣屋の生活 …… 52
民間信仰 …… 53
埴輪の世界 …… 54・55
【コラムⅥ】　羽子田1号墳の牛形埴輪 …… 55
よみがえる古代の技術 …… 56・57

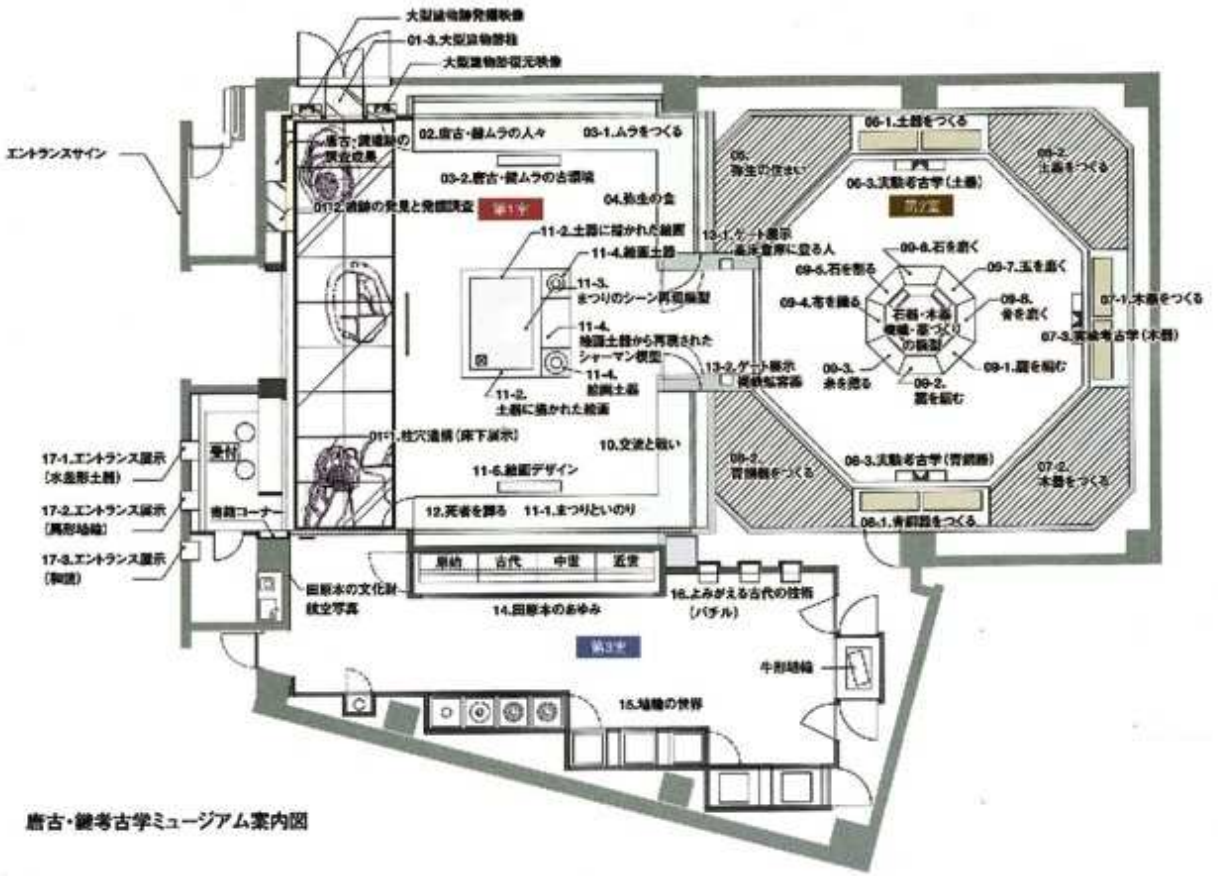
田原本の歴史地図 …… 58
田原本の考古学年表 …… 59
展示資料一覧 …… 60～63
展示関係者一覧 …… 64

館内案内



田原本青垣生涯学習センター施設案内図

文化財展示ケース



唐古・鍵考古学ミュージアム案内図

利用案内

◎ 開館時間　午前9時から午後5時まで
（入館は午後4時30分まで）

◎ 休館日　毎週月曜日（祝休日の場合は、その次の平日）
12月28日～1月4日

◎ 観覧料　大人　200（150）円
高校生・大学生　100（50）円
※（）内は20名以上の団体料金

◎ 交　通　近鉄田原本駅下車　徒歩20分
西名阪自動車道「郡山」インターから約30分

◎ 所在地　奈良県磯城郡田原本町阪手233-1
田原本青垣生涯学習センター内

◎ TEL　0744-34-7100

◎ FAX　0744-32-8770

◎ URL　http://www.karako-kagi-arch-museum.jp/

第Ⅰ部　唐古・鍵の弥生世界

遺跡の発見と発掘調査 *Discovery and Excavation*

唐古・鍵遺跡は、1901年に高橋健自氏により報告されて以来、多くの調査・研究が重ねられてきた。特に1936・37年に行われた末永雅雄博士らによる唐古池の発掘調査は、その後の弥生時代研究の基礎を築いた。その後、1977年からは本格的な発掘調査が再開され、現在まで継続されている。こうした調査によって、唐古・鍵遺跡が日本を代表する環濠集落であることが明らかとなり、1999年には国の史跡に指定された。

◎調査・研究のあゆみ◎

1901年　高橋健自氏により唐古遺跡がはじめて学界に報告される。

1929年　飯田松治郎・恒男氏によって『大和唐古石器時代遺物図集』が刊行される。

1936・37年　末永雅雄博士らによって第1次調査が行われる。

1943年　『大和唐古弥生式遺跡の研究』が刊行される。

1977年　奈良県立橿原考古学研究所により本格的な発掘調査が再開され、南側環濠を検出（第3次調査）。

これ以降、遺跡名が唐古・鍵遺跡に統一。

1981年　鴨頭形土製品が出土（第11次調査）。

1982年　田原本町教育委員会を主体とした発掘調査が開始される（第13次調査）。

1985年　木棺墓から人骨が出土（第23次調査）。

1986年　唐古・鍵遺跡発掘50年記念のシンポジウムを開催。

1987年　細形銅矛片が出土（第33次調査）。

1989年　サヌカイトの原石が出土（第37次調査）。

『弥生の巨大遺跡と生活文化』を刊行。

1990年　郷土資料展示室を開設。

1992年　第47次調査出土遺物を洗浄中に、楼閣絵画土器を発見。

1994年　唐古池に楼閣を復元。

1996年　唐古・鍵遺跡の発掘調査60年記念展『弥生の風景』を開催

（田原本町・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館共催）。

1997年　青銅器鋳造関連遺構・遺物を検出（第65次調査）。

1999年　唐古・鍵遺跡が国史跡に指定（約99,000m²）。記念講演とシンポジウムを開催。

大型建物跡を検出（第74次調査）。

2000年　銅鐸片が出土（第77次調査）。

2001年　唐古・鍵遺跡発見100年、池上曽根史跡公園開園、博物館開館10周年を

記念して、大阪府立弥生文化博物館が『弥生都市は語る』展を開催。

『唐古・鍵遺跡の考古学』を刊行。

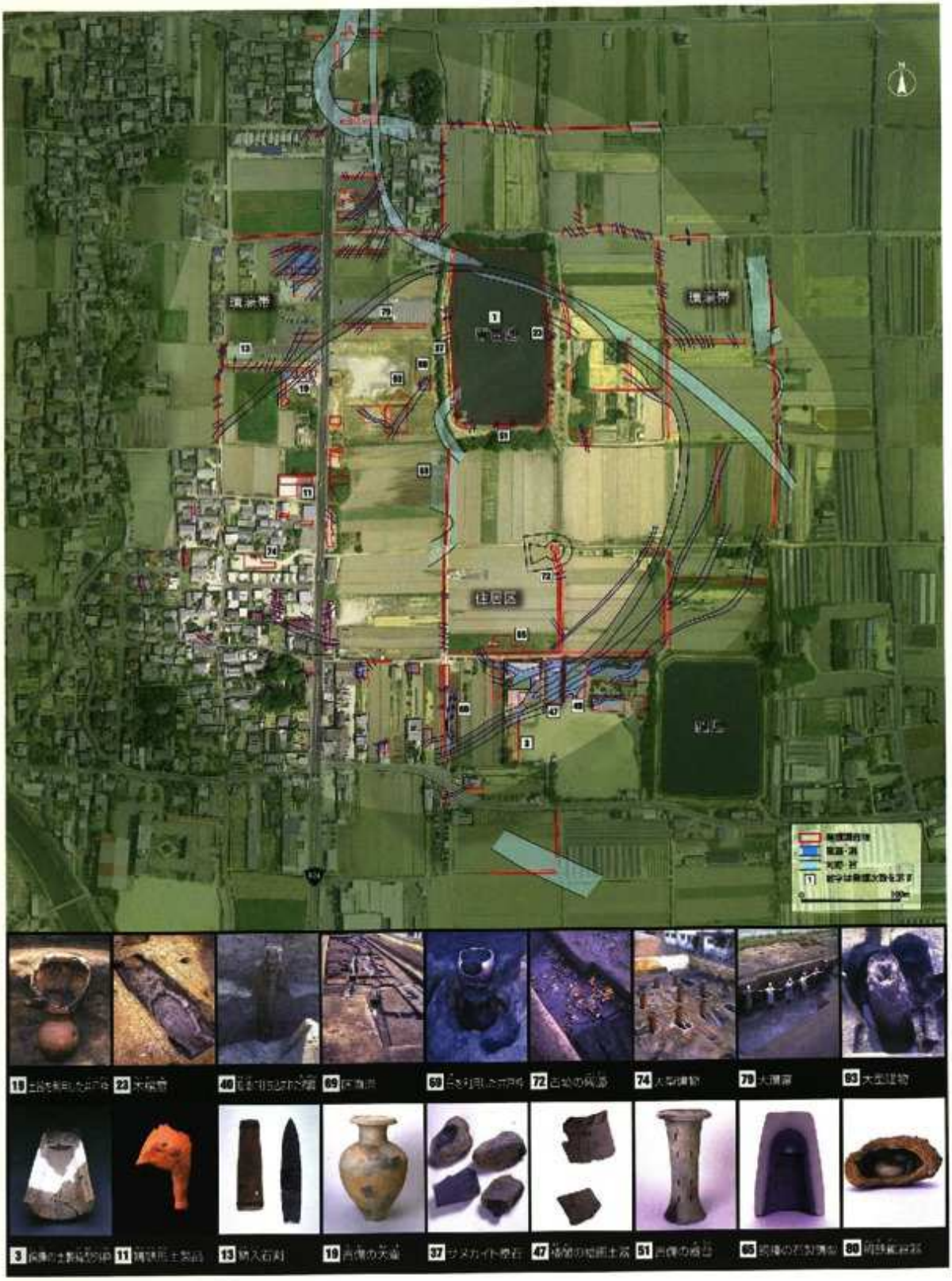
2002年　褐鉄鉱容器と勾玉が出土（第80次調査）。

第74次調査の大型建物跡 追加指定（約1860m²）。

2003年　新たに大型建物跡を検出（第93次調査）。

2004年　唐古・鍵考古学ミュージアムを開設。

1-1　末永博士調査のカメラ



1-2　唐古・鍵遺跡の範囲と調査成果（数字は調査次数）

唐古・鍵ムラの人々 *Peoples in Yayoi Period*

第23次調査では、弥生時代前期の木棺墓から男性の人骨が検出された。この人骨は身長160cm前後を測り、当時としては長身である。また顔の骨格は面長で、渡来系の特徴をもっていた。出土した人骨は保存状況が悪く、顔の右半分を失っていたが、頭骨の特徴が類似する蒙古人を参考にして顔の復元が試みられた。

また唐古・鍵遺跡では、勾玉や管玉・丸玉などの装飾品や、櫛や簪などの髪飾りが出土し、当時のよそおいが推測される。

唐古・鍵人データ	
性　別	男性♂
名　前	?
年　令	20歳代後半～30歳代前半
身　長	162cm
体　重	?
生　年	紀元前2XX年
体　格	縄文
容　姿	面長で長身
顔　立	まゆ→濃い 目→きれ長 耳たぶ→小さい くちびる→薄め ひげ→少ない

2-1　よみがえった唐人

1 頭骨の検出
人骨は保存状況が悪かったので、現場では土塊ごと取り上げて研究室で洗浄。

2 復顔工程1
蒙古人の復顔技術に、唐古・鍵出土の複顔頭骨をはめ込み骨格を復元。

3 復顔工程2
頭骨複製に、粘土やワックス・シートを貼り付け、筋肉や皮膚を復元。

4 復元の完成
骨の形が類似する蒙古人の特徴を参考に、目・耳・唇など顔の表情を復元。

2-2　唐人の顔を復元する

2-3　鋤・竪櫛・牙製垂飾・刺突具

2-4　勾玉・管玉・丸玉

2-5　さまざまな色の玉

ムラをつくる *Settlement*

稲作など新しい技術をもった人たちは、大和川をさかのぼり唐古・鍵の地にたどり着いた。彼らは樹木を伐採し、新たなムラを切り開いた。奈良盆地における最初の弥生ムラの誕生である。

その後、弥生時代の中頃にはムラ周囲に濠がめぐらされ、多重の環濠帯をもつ大規模な環濠集落に変貌した。環濠内部の居住域は14ha、環濠帯をあわせた面積は約42haに及ぶ。

唐古・鍵遺跡の環濠は断面がU字状を呈するものが多く、幅は6～8m、深さは最大で2mを測る。

弥生時代中期の末葉には、洪水により環濠の多くが埋没するが、後期に濠は再掘削され古墳時代前期まで唐古・鍵ムラは継続した。

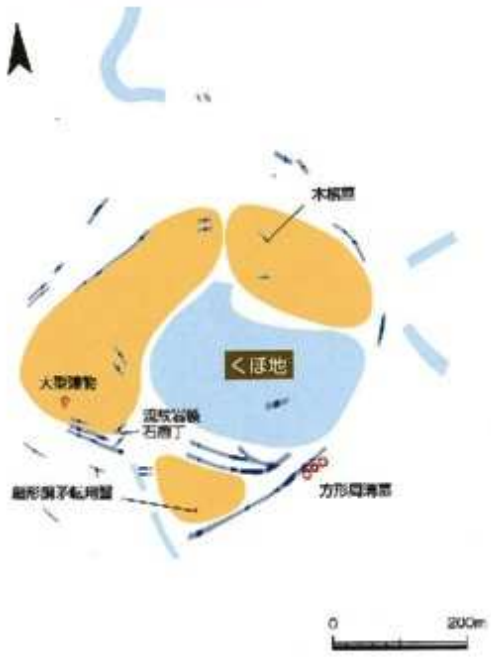
3-1　縄文から弥生へ（左2点：縄文後期深鉢、右3点：弥生前期 甕・壺・鉢）

3-2　環濠を掘る道具

3-3　唐古・鍵遺跡の環濠（第47次）

3-4　ムラの南東部を囲む環濠群（第47次調査）

唐古・鍵ムラの変遷



3-5 弥生前期の唐古・鍵ムラ

弥生前期の唐古・鍵遺跡は、微高地上に集落が営まれ、3つのムラに分かれていた。第74次調査で検出された大型建物跡は、西地区に位置している。

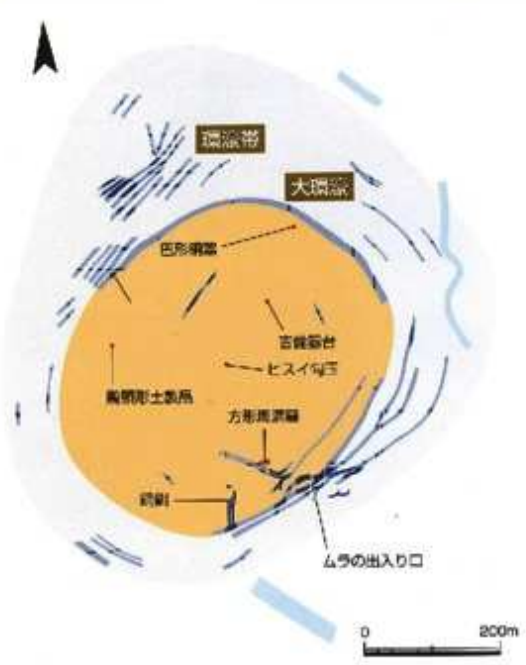
3-6 弥生中期の唐古・鍵ムラ

中期中頃には、ムラ周囲に多重環濠がめぐり、大規模な環濠集落に変貌した。第93次調査では大型建物跡が、第65次調査では青銅器鋳造に関連する炉跡状遺構が検出されている。

コラムⅠ 動物・昆虫からみたムラの環境

3-9 ムラ周辺の環境と出土した動物骨・昆虫遺体

唐古・鍵遺跡は低地部に立地するため、動物の骨や植物の種など自然遺物の残存状況が良好で、遺跡周辺の環境を復元するうえで豊富なデータを得ることができる。



3-7　弥生後期の唐古・鍵ムラ

中期末葉には、洪水により環濠の多くが埋没するが、後期には環濠が再び掘削されている。

3-8　古墳前期の唐古・鍵ムラ

弥生時代終末から古墳時代初頭にも、環濠の掘削はつづけられ、古墳時代前期までムラが継続する。

ここでは唐古・鍵遺跡で出土した小動物や昆虫、花粉分析の成果をもとに、ムラ周辺の環境を復元した。

弥生の食 *Agriculture and Hunter-Gather*

米づくり

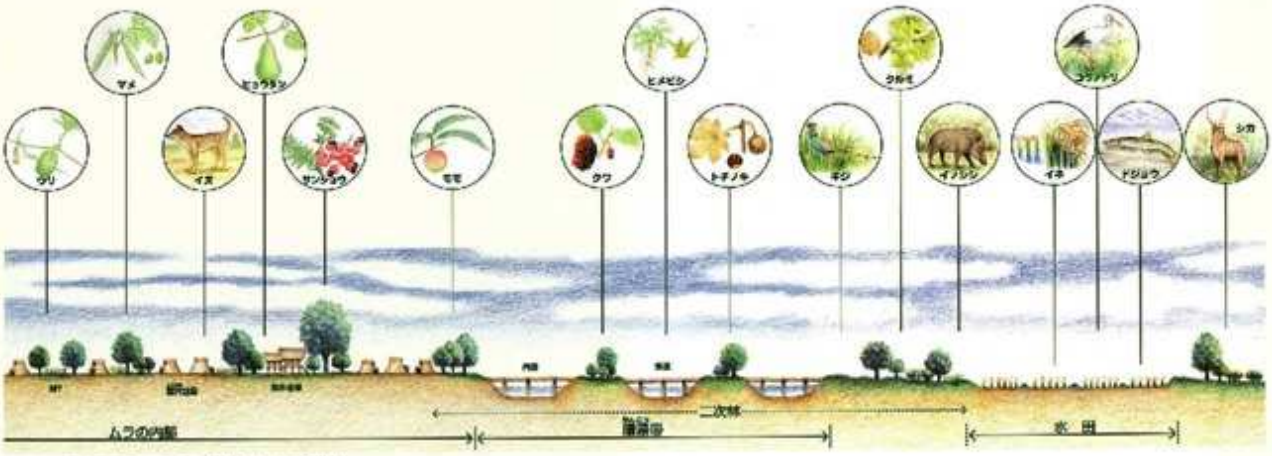
1936・37年に行われた唐古池の調査（第1次調査）では、多量の木製農具が出土し、稲作の存在が初めて実証された。こうした成果は、戦後の登呂遺跡の発掘調査に受け継がれ、弥生時代に本格的な稲作農耕が開始したという考え方が定着した。

唐古・鍵遺跡では、その後の調査でも、さまざまな農具類や炭化米・穂束などが出土している。

4−1　刈りとられた稲束と稲穂

4−3　木製の農具（1、平鍬　2、竪杵）

4−2　稲穂を摘む道具（石庖丁・木庖丁）



4−4　遺跡周辺の生態と食料とされた動植物

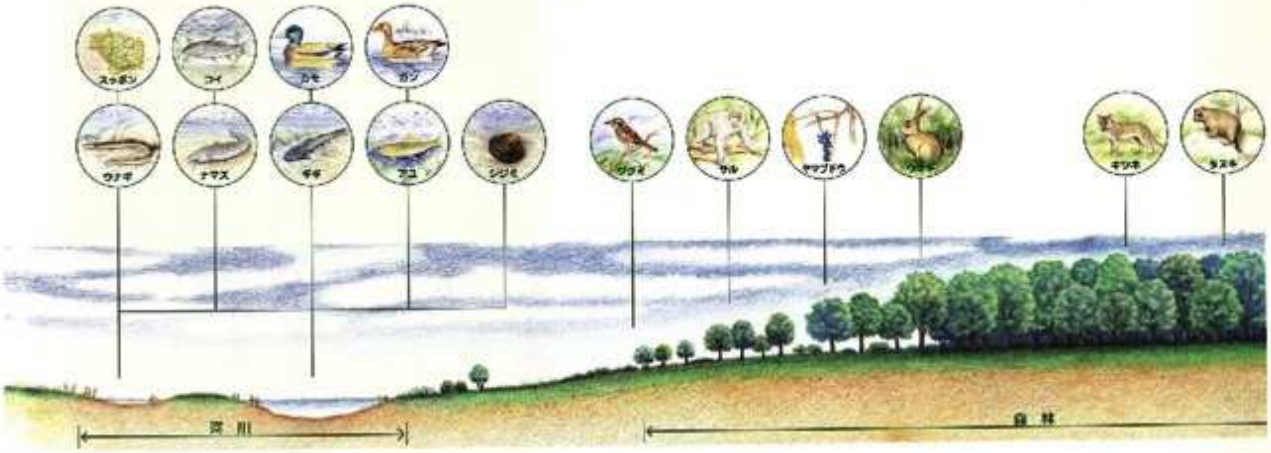
栽培と採集

稲作の始まった弥生時代には、雑穀や植物の栽培も盛んになった。唐古・鍵遺跡では、雑穀類やモモ・ウリ・マメなど栽培された植物が出土している。また食料の不足を補うためにクルミやトチノミなどの堅果類の採集もおこなわれた。第11次調査では、アク抜きの為に水漬けされたドングリピットが検出されている。

4-5　栽培・採集された植物（マメ・ウリ・ヒョウタン・モモ・クルミなど）

4-7　雑穀を炊いた壺とその内部

4-6　植物を栽培・調理する道具



漁撈と狩猟

漁撈・狩猟は縄文時代からの伝統的な生業である。稲作の始まった弥生時代にも、これらは重要な位置を占めており、唐古・鍵遺跡でもウナギ・アユ・コイ・ドジョウ・ナマズ・イノシシ・シカ・ウサギ・ガン・カモ・キジ・スッポンなどの魚骨・動物骨が出土している。

また手網・網錘・弓矢・投弾など、漁撈や狩猟に使われた道具もみられる。

4-8　食料とされた魚介類

4-9　食料とされた動物骨（イノシシ・シカ）

4-12　狩猟

4-10　漁撈の道具（上：手網の木枠、下：網のおもり）

4-13　弓と矢

4-11　狩猟の道具（上から石製投弾・土製投弾・骨鏃・石鏃）

弥生の住まい *Dwelling*

唐古・鍵遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・大型建物といった建物跡や井戸や貯蔵穴・溝状遺構などが検出されている。これらは集落内で計画的に配置され、地区ごとに居住区や工房区など機能的な差が認められる。

また壁材・杉皮・窓枠状木製品などの建築部材や、さまざまな生活道具も数多く出土し、当時の暮らしを考えるうえで重要な資料となっている。

5-1　窓枠状木製品

5-2　建築部材（左上:建物飾り、左下:壁土、右:杉皮）

5-4　高床建物に架けられた梯子

5-3　住まいの道具（1.火鋤日　2.作業台　3.自在鉤）

さまざまな井戸

唐古・鍵遺跡では、大環濠が成立した弥生時代中期以降、様々な井戸がつくられた。このうち最も多いのは、井戸枠をもたない素掘りの井戸である。また、旧河道中の砂層中には、土器の底部を打ち欠き井戸枠とした「集水施設」もつくられた。

井戸からは、完全な形の土器がしばしば出土する。これらは唐古・鍵ムラの人々が、清水を得ることを願い、井戸の神に土器を供献したものと考えられる。

5-5　木枠をもつ井戸（第23次）と刳り貫き井戸（第23次）

5-6　土器枠を利用した「集水施設」（左：第19次、右：第20次）

5-7　素掘り井戸に供献された土器（左：第37次、右：第33次）

5-8　井戸に供献された壺（左：第37次、右：第5次）

大型建物跡

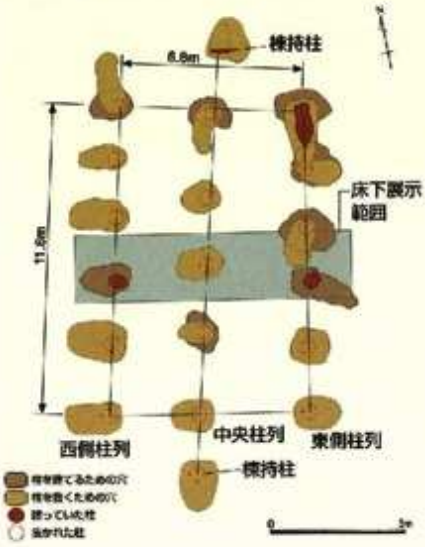
唐古・鍵遺跡では、第74次と第93次調査において大型建物跡を検出している。この大型建物跡は、それぞれ時期が異なるが、いずれも唐古・鍵遺跡の西地区に位置し、西地区の中心施設と推定される。

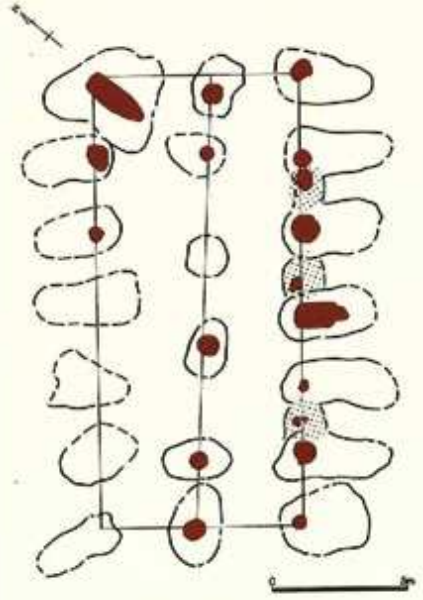
これらの建物は中央の棟通りにも柱をもつ総柱型で、柱材にはケヤキが多用されていた。また第74次調査の建物跡では、北側妻部の外側にヤマグワ材の棟持柱がみられる。

5-9　第74次調査で検出された大型建物跡

5-10　大型建物跡の柱（左上：第74次調査、右下：第93次調査）

5-11　第93次調査で検出された大型建物跡





5-12　大型建物跡の平面図（上：第74次、下：第93次）

土器をつくる *Pottery Making*

唐古・鍵遺跡では大量の弥生土器が出土する。弥生土器は輪積みによって成形され、轆轤の利用は認められない。また野焼きにより600～800℃で焼成されることから、褐色を呈することが多い。

弥生土器の製作を具体的に示す遺物は少ないが、唐古・鍵遺跡では、製作途中に破損して握りつぶした土器片や、土器乾燥中につけられたイヌの噛み痕やネズミの爪痕を残す土器片が出土している。また、土器製作の道具であるタタキ板も出土している。

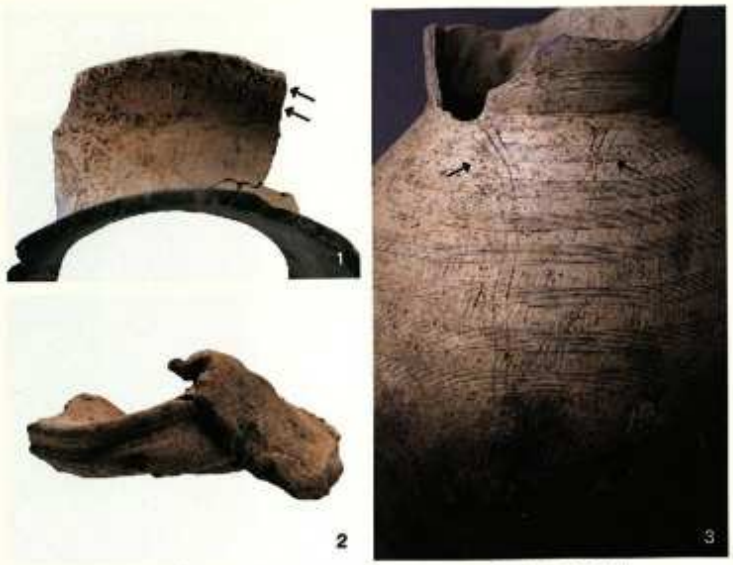
6-1　同一作者がつくった土器（左2点：形とタタキ、右2点：ハケと記号）

6-2　製作痕跡を示す土器（1．底部の木葉圧痕　2．輪積み痕）

6-4　タタキ板

6-5　製作途中に補修した土器

粘土による補修がみられる。これは土器の製作途中にヒビ割れをおこし、その箇所を補修したものである。



6-3　製作中のトラブル（1．イヌの噛み痕　2．失敗して捨てた壺の口縁　3．ネズミの爪痕）

コラムⅡ　実験考古学　～弥生土器をつくる～

唐古・鍵遺跡からは、多量の弥生土器が出土しているが、製作過程を示す資料は少ない。しかし、弥生土器に残る成形痕や工具痕の観察から、土器の製作過程をたどることができる。土器の底についた木葉の圧痕、土器内面の輪積み痕、接合を強くするためのタタキやハケ（板）・ミガキ・ナデ調整などさまざまな技術が使われている。

今回の製作実験では、弥生土器の中でも最も器種が分化し、華麗な櫛描文で飾られた中期の土器を製作し、焼成をおこなった。

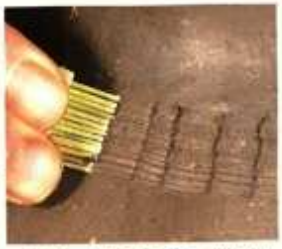
6-6　実験でつくった土器

6-7　実験で使った道具

粘土に同量ちかくの砂を混ぜる。

4段ほど粘土紐を積み上げる。

粘土紐の接合痕を板（ハケ）でナデて、密着を強くする。



完成後、土器表面を整え、櫛状の道具を束ねたもので文様を施す。

充分に土器を乾燥させた後、野焼きの準備にかかる。

土器は直接火に近づけず、徐々に土器を熱する。

土器の水分が無くなった後、火の中心部に近づける。

約3時間で土器の焼成が完了。

6-8　土器づくりの風景

形と文様

弥生土器は、壺や甕・鉢・高坏・器台で構成される。弥生時代前期には、壺・甕・鉢を基本とし、弥生時代中期には、これら器種の分化が進むとともに高坏や器台が出現・増加する。近畿地方では華麗な櫛描文様をもつ土器も多くなる。弥生時代後期になると各器種ともに小型化し、文様を消失した飾らない土器が大半を占めるようになる。

このように土器の組合せや法量、装飾法などには時間的な変化や地域差が認められ、食文化の移り変わりや文様の流行が反映されている。

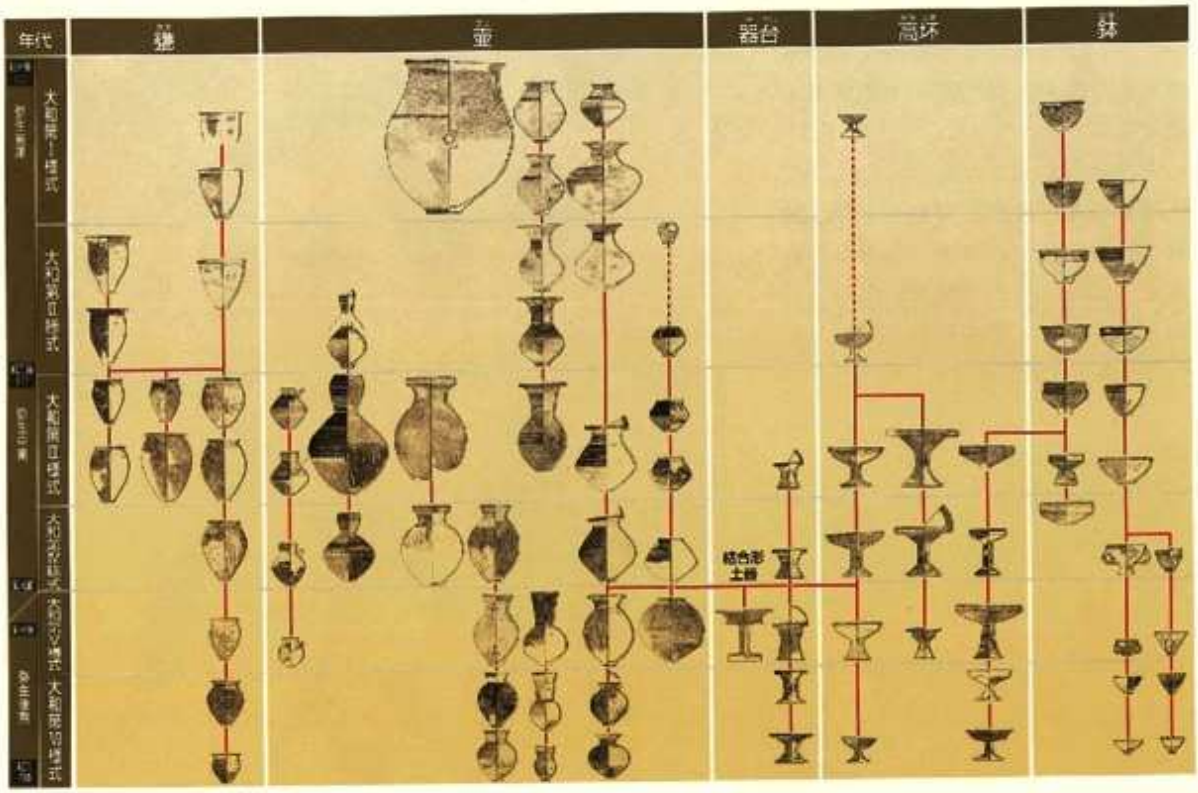
6-9　さまざまな文様(1.斜突文　2.羽状文　3.綾杉文　4.山形文)

6-10　器種分化が進んだ弥生時代中期の土器

弥生土器の編年

土器の器形や文様・製作技法を比較検討し、土器の系統関係や時期的な変遷を明らかにしていく作業を考古学では「編年」と呼んでいる。編年研究では出土した土器の一括性や、層位的な関係が重要で綿密な発掘調査が基礎となる。

1943年、小林行雄氏は唐古池の調査報告書の中で、近畿の弥生土器を５つの様式に区分し、体系的な編年を初めて提示した。その後も土器の編年研究は深められ、現在では６つの大様式、21の小様式に細分されている。



6-11　大和における弥生土器の編年

6-12　壺の変遷（左からむへ大和第Ⅰ様式から第Ⅵ様式へ）

木器をつくる *Woodworking*

唐古・鍵遺跡では、ケヤキやカシなどムラ周辺の広葉樹を伐採して、さまざまな木器が製作された。木器は腐朽が著しく遺跡に残されることは少ないが、低地部に立地する唐古・鍵遺跡では、豊富な木製品が出土している。このなかには製作途中の未成品もみられ、製作工程を考える上で貴重な資料となっている。

弥生時代には、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧などの磨製石斧が出現し、木器の加工に使われた。また、唐古・鍵遺跡では、青銅製鑿（のみ）・鉄斧・鉄製ヤリガンナなどの金属製木工具も出土している。

7-1　木を倒す道具

7-2　木を削る道具

7-3　金属製の木工具とその柄

7-4　鹿角を利用した除柄の開墾具

食器をつくる

弥生時代の食器として、土器や木製の容器・杓子があげられる。このうち木製の食器類は、腐朽が著しく、土器に比べて残存することは少ないが、食物の盛り付けには木製の食器が適しており、当時、重要な役割を果たしていたと考えられる。唐古・鍵遺跡では、高坏・鉢・四脚容器・匙などの木製食器類や、鳥の胴部を表現した特殊な形態の容器が出土している。

しかし、高坏など複雑な形をした木製容器は、徐々に土器に置き換えられていった。

7-5　台盤・杓子の未成品

7-6　蓋付高坏

7-7　蓋付四脚容器

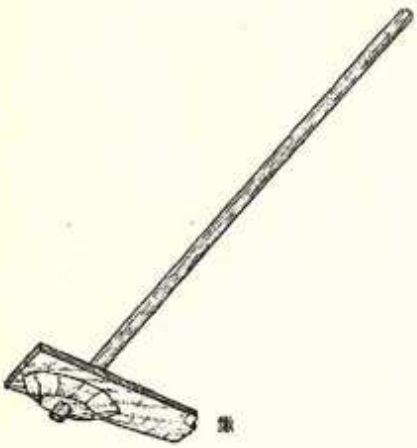
農具をつくる

稲作の始まった弥生時代には、鋤や鍬・泥除（かんよけ）などの木製農具が製作された。こうした農具の製作には「みかん割り」によって得られた板材が利用され、同じ形の製品を効率的につくることができた。

板材を利用した木器の製作は、弥生時代からみられるもので、当時の木工技術において、効率的なシステムが整備されていたことがわかる。

7-8　木を加工する風景

7-9　鍬の製作工程



7-11　鍬と泥除の装着法

7-10　泥除の製作工程

7-12　木の加工法

7-13　曲柄鍬（えびょうし）の未成品（左）と組合せ鍬の製作工程

7-15　曲柄鍬と一木鍬、組合せ鍬の装着法

7-14　一本鍬の製作工程

木器貯蔵穴

唐古・鍵遺跡では、製作途中の木製品が水漬けされた状態で出土する。これらは木のアク抜きやひずみの修正などを目的として、意図的に貯木したものと考えられる。

特に弥生時代前期には、木製品を水漬けする長方形や円形の専用の穴（木器貯蔵穴）が多く掘削されている。

こうした木器貯蔵穴は、弥生時代中期以降少なくなり、代わりに井戸や区画溝・環濠などの水たまりを利用して、木製品の水漬けが行われた。

7-16　木器貯蔵穴（前期:第33次）

7-17　木器貯蔵穴（中期:第33次）

7-18　区画溝に貯木された鍬・鍬の未成品（中期:第63次）

コラムⅢ　実験考古学 ～木器をつくる～

太型蛤刃石斧で木を切り倒し板材を得る工程と蓋付四脚容器を製作する実験を試みた。太型蛤刃石斧は、唐古・鍵遺跡でも使用されている閃緑岩を高槻市安威川で採集した。唐古・鍵遺跡では、全長15cmに満たない石斧が多いが、直径30cmを超えるような太い木を切り倒すには刃が短かすぎることが判明した。

また、容器の製作にあたっては、第3次調査で出土した四脚容器をモデルにした。10年以上乾燥させたケヤキ材は非常に堅く、そのままでは加工が困難で、水漬けを必要とした。唐古・鍵遺跡から水漬け状態で出土する未成品の多くは、木材の表面の軟化が目的であったことがうかがい知れるのである。

7-19　実験でつくった木製容器

7-20　実験で使った道具

直径30cmのクヌギを太型蛤刃石斧で伐採開始。

中心部に進むにつれて硬い。約4,900回で伐採完了。

カシの楔を打ち込む。

みかん割りによって半截されたクヌギ。

7-21　木器づくりの風景

青銅器をつくる *Metalworking*

青銅器の鋳造は当時の先端技術であり、各地域の拠点集落で行われた。唐古・鍵遺跡では、ムラの東南部にあたる第3・61・65次調査地で、銅鐸や武器などの鋳型外枠や送風管、取瓶（とりべ）が多量に出土している。特に第65次調査では、青銅器の鋳造に関連する炉跡状遺構が検出され、工房の位置が判明した。

検出された炉跡状遺構は、長方形の土坑で、長軸92cm・短軸75cmを測る。この土坑の中央には長さ45cm・幅11～16cmの範囲の堅く焼きしまった焼土面がみられ、炉の下部構造と考えられる。

8-1　炉跡状遺構（第65次）

8-2　青銅器の原料（上段：取瓶の内土に付着した銅滓、下段：鉛塊）

8-3　送風管と取瓶

8-4　高熱を受け変形した土器

銅鐸の鋳造

唐古・鍵遺跡では、石製の銅鐸鋳型や土製の銅鐸鋳型外枠が出土している。土製の銅鐸鋳型外枠は、弥生時代中期末葉から後期初頭に位置づけられ、銅鐸が大型化する時期に一致する。

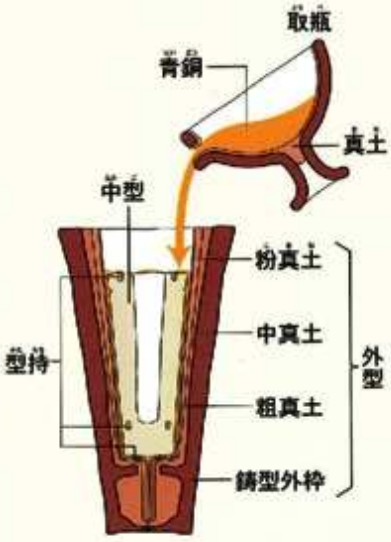
石製鋳型から土製鋳型への転換は、作業の効率化と銅鐸の大型化に対応する可能性が高く、唐古・鍵遺跡で出土した鋳型外枠は、銅鐸製作の技術革新を考えるうえで、重要な意味をもっている。

8-5　石製の銅鐸鋳型（左）と復元品

8-8　銅鐸片

第77次調査で出土した。この銅鐸片は断面が8mmと厚く、下端には湯切れ痕がみられる。鋳造に失敗しスクラップにされたものだろう。

8-6　小型銅鐸の鋳型外枠



8-9　銅鐸鋳型の構造

8-7　大型銅鐸の鋳型外枠

他の鋳型外枠と青銅器

唐古・鍵遺跡では、銅鐸鋳型以外にもさまざまな土製鋳型の外枠が出土している。真土（まね）の部分が残存しないため、製品の特定は困難であるが、外枠の形から銅鏃・銅戈の武器類や銅鏡・銅鋼などの鋳型と考えられる。

また青銅器工房跡付近からは、銅鏃・銅鋼・銅鏡・有孔銅製品などの青銅製品やガラス製の勾玉が出土しており、唐古・鍵遺跡において鋳造された可能性が高い。

8-10　鏡・鋼?の鋳型外枠

8-13　武器形青銅器の鋳型外枠復元品

8-11　武器形青銅器の鋳型外枠

8-14　ガラス製勾玉

8-12　青銅製品（上段左から:鉇・鏃、下段左から:巴形銅器・有孔円板、右手:鋳型）

コラムⅣ　実験考古学 ～銅鐸をつくる～

銅鐸の鋳造は、弥生時代の青銅器鋳造のなかでも最も難しい技術である。唐古・鍵遺跡では、これまで知られていなかった鋳型の外枠が出土しており、これを用いてどのような鋳型を製作し鋳造したかは不明であった。

今回の実験では、唐古・鍵遺跡出土品に基づき、銅鐸を復元した。鋳造した銅鐸は、逸翁美術館に所蔵される伝・高瀬川銅鐸を参考にした。

炉は第65次調査の炉跡状遺構から「甑炉」を想定し、高坏形土製品は「甑炉」から直接「湯」を取る「取瓶」と考えた。次に湯口は、辰馬考古資料館所蔵の鋳放し銅鐸を参考にして、「はばき」を作らずに鋳込んだ。

今回の実験により、土製鋳型でも同笵銅鐸の製作が可能であることが明らかになった。

8-15
実験でつくった銅鐸

8-16　実験で使った道具

8-18　鋳放し銅鐸

8-17　土製鋳型と銅鐸

鋳型外枠に粗真土を貼り付ける。

粘質土を張り、文様を施み、鋳型の完成。

炉から溶けた青銅（湯）を取瓶で受ける。

鋳中に埋め込んだ鋳型に取瓶の湯を注ぐ。

8-19　銅鐸づくりの風景

さまざまな手仕事 *Hand Crafts*

籠を編む

蔓や樹皮などを編む技術は、縄文時代から継承された。唐古・鍵遺跡でも、籠や箕などのさまざまな編み物が製作された。

9-2　井戸から出土した籠（第20次）

9-1　籠を編む道具

藁を編む

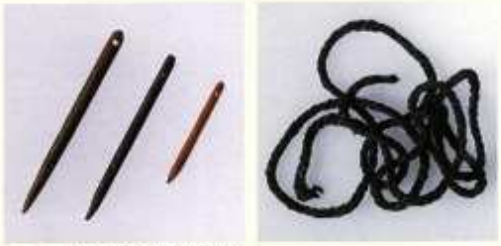
稲作の伝わった弥生時代には、藁の編み物が出現した。特に根刈りのはじまった弥生時代後期には、重量のある大きな木錘が出現し、12点ほどまとまって出土することがある。このほか編台や横槌などの藁を編む道具もみられ、藁の利用は盛んになった。

9-3　藁を編む風景

9-4　藁を編む道具（左：横槌、中央：木錘、右：編台）

糸を撚る

唐古・鍵遺跡では、主に大麻を利用して糸の製作が行われた。糸を撚る道具として、紡錘車が知られており、回転を利用して均質な糸を撚ることができた。



9-5　縫い針（左）と麻縄（右）

9-6　糸を撚る道具と糸巻き

布を織る

弥生時代には、大陸から機織り技術が伝わった。唐古・鍵遺跡で出土した布切れには、二本の糸をあわせて撚る「併糸」という技術がみられ、織りはたいへん細密である。

唐古・鍵遺跡の布片は、大麻を原料としているが、「併糸」は平絹にみられる技術であり、当時の高級品と考えられる。

9-7　機織りの農耕

9-9　麻布

9-8　機を織る道具（上段：布巻具、下段：横打具）

石を割る

二上山（奈良県香芝市周辺）でとれるサヌカイトは、旧石器時代以来、打製石器の素材として利用された。

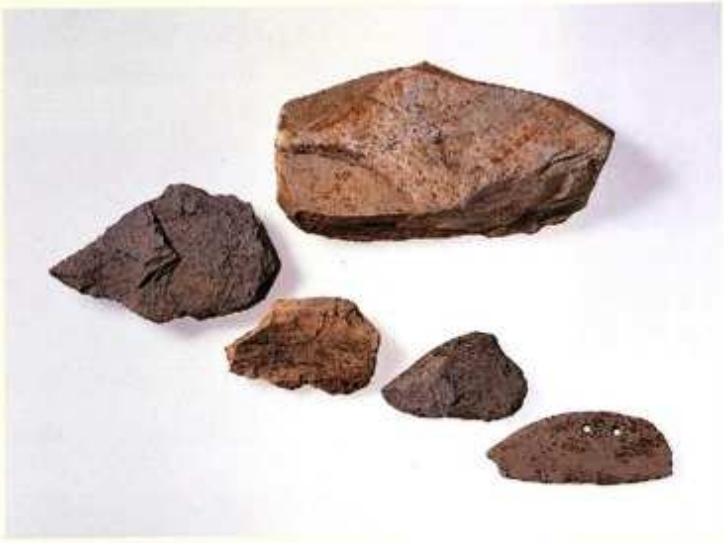
唐古・鍵遺跡では、重さ10kgほどのサヌカイト原石が持ちこまれ、武器や工具などが製作された。

9-10 打製石器の製作

石を磨く

弥生時代の前半期には、主に石を研磨して、農具や木工具を製作した。

唐古・鍵遺跡では、穂摘み具である石庖丁の製作が認められ、前期には耳成山（奈良県橿原市）の流紋岩が、中期には紀ノ川流域の結晶片岩が素材として利用された。



9-11 石庖丁の製作工程(流紋岩)

9-12 石庖丁の製作工程(結晶片岩)

玉を磨く

弥生時代にはヒスイや碧玉（へきぎょく）などを加工して装身具が製作された。これらは製品として、唐古・鍵遺跡に運ばれることが多かったが、砥石や未成品の出土から、唐古・鍵遺跡でも玉を加工していたことがわかっている。

9-13 装飾品の製作

骨を磨く

唐古・鍵遺跡では、鹿の中手骨・中足骨や鹿角などを利用して、さまざまな道具が製作された。

9-14 鹿角製品の製作

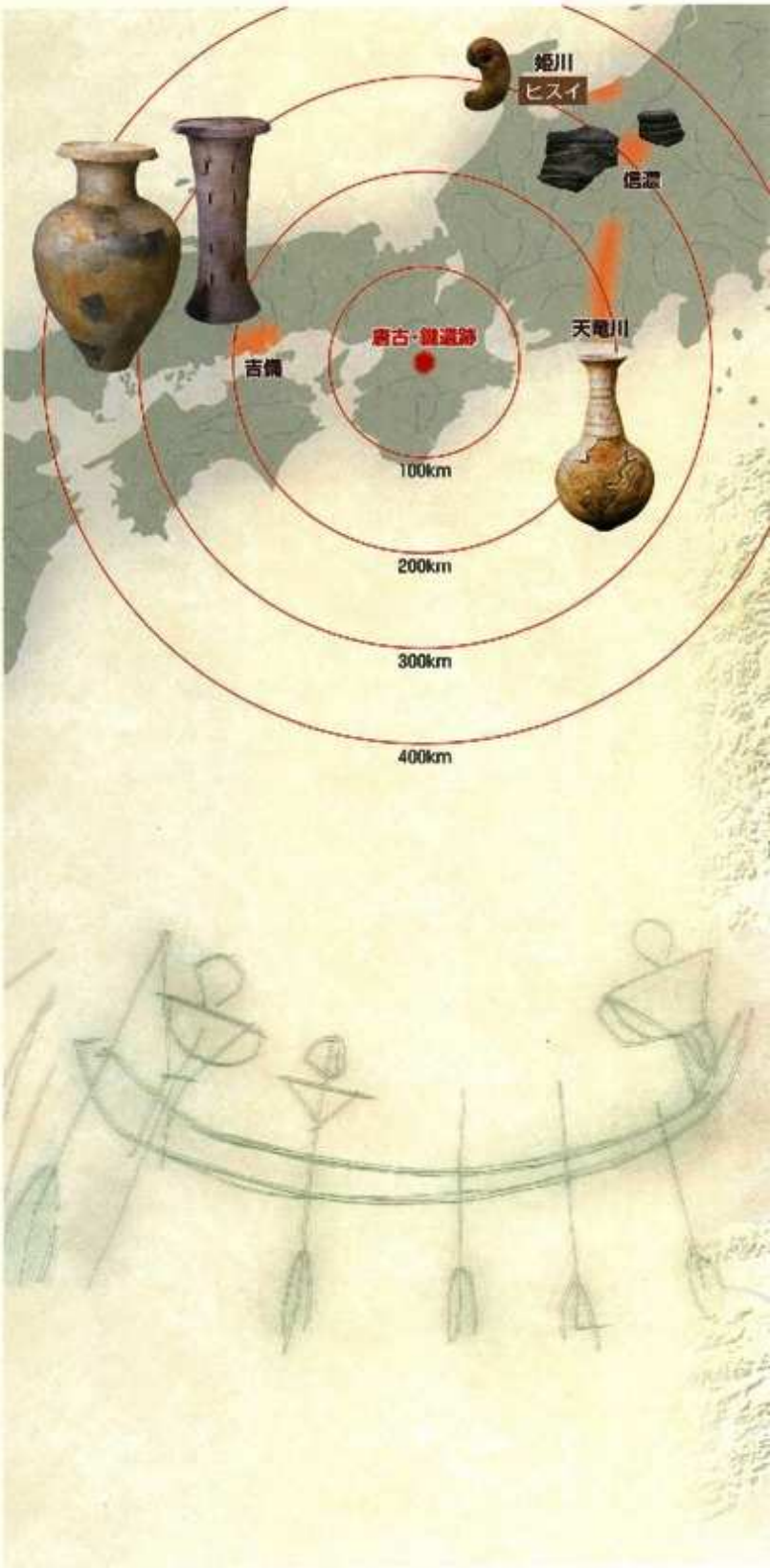
9-15 骨器の製作（鹿の中手骨・中足骨）

交流と戦い *Exchange and Conflict*

交流

弥生時代には各地の拠点集落を中心に、さまざまな交流がおこなわれた。唐古・鍵遺跡では、姫川流域（新潟県糸魚川市周辺）で産出するヒスイ製の勾玉や丹後産と推定される水晶玉などの玉類、吉備や尾張などの遠方から運ばれた土器、ハモやアカニシなどの魚介類が出土し、当時の交流が、広域におよんでいたことがわかる。

また唐古・鍵遺跡では、近接する河内・和泉・紀伊・摂津・近江の土器が出土し、近畿周辺の交流において、重要な位置を占めていたと考えられる。



10-1　唐古・鍵ムラに運ばれたもの

奈具岡遺跡
水晶製作跡
近江
尾張
三河
伊勢
伊賀
丹波山地
粘板岩
摂津峡
関緑岩
摂津
播磨
河内
唐古・鍵遺跡
和泉
二上山
サヌカイト
耳成山
流紋岩
紀ノ川
結晶片岩
紀伊
唐古・鍵遺跡で出土した魚介類
クジラ
サメ
エイ
タイ科
マイワシ
ハモ
イイダコ等
ムラサキウニ?
バフンウニ
アカニシ
ウニニナ

戦い

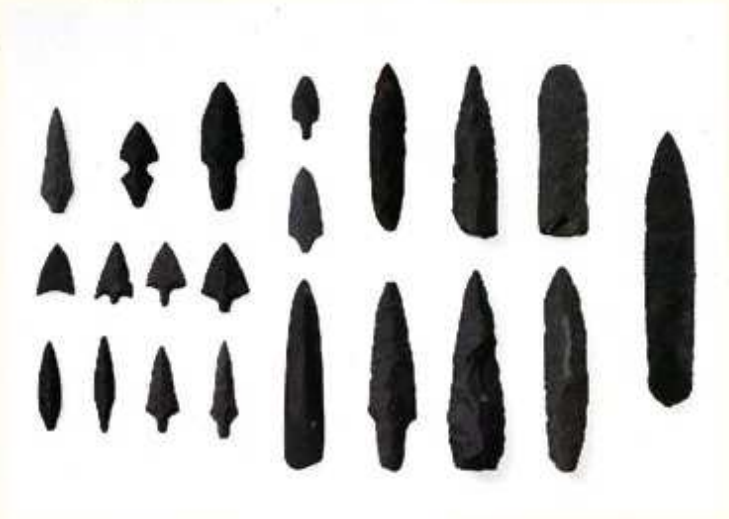
弥生時代には高地性集落の出現や、石鏃・石剣などの武器の発達、武器の刺さった人骨の出土例などから、戦いがあったと考えられている。唐古・鍵遺跡でも、木製の盾や石戈・石剣・石鏃などが出土している。

また第13次調査では、鞘に入った石剣が出土し、石剣の着装方法を考えるうえで注目を集めた。

10-2　鞘に入っていた石剣

10-3　石戈と俵、環状石斧

10-5　木製の盾



10-4　さまざまな武器（石鏃・石剣）

まつりといのり *Ritual*

弥生時代の人たちは自然の恵みに感謝し、自然の脅威に畏れもした。唐古・鍵遺跡では卜骨や土製品・武器形木製品などさまざまなまつりの道具が出土し、いろいろな場面でまつりをおこない、神々に祈りを捧げていたことがわかる。動物をかたちどった土製品のなかには、ニワトリの頭を模した土製品があり、弥生時代にニワトリがいたことを示す資料としても注目された。

また唐古・鍵遺跡では、中期には絵画を描いた土器が、後期には記号をもつ土器が多量に出土する。

11-1　卜骨と穿孔されたイノシシ下顎

11-2　さまざまなまつりの道具

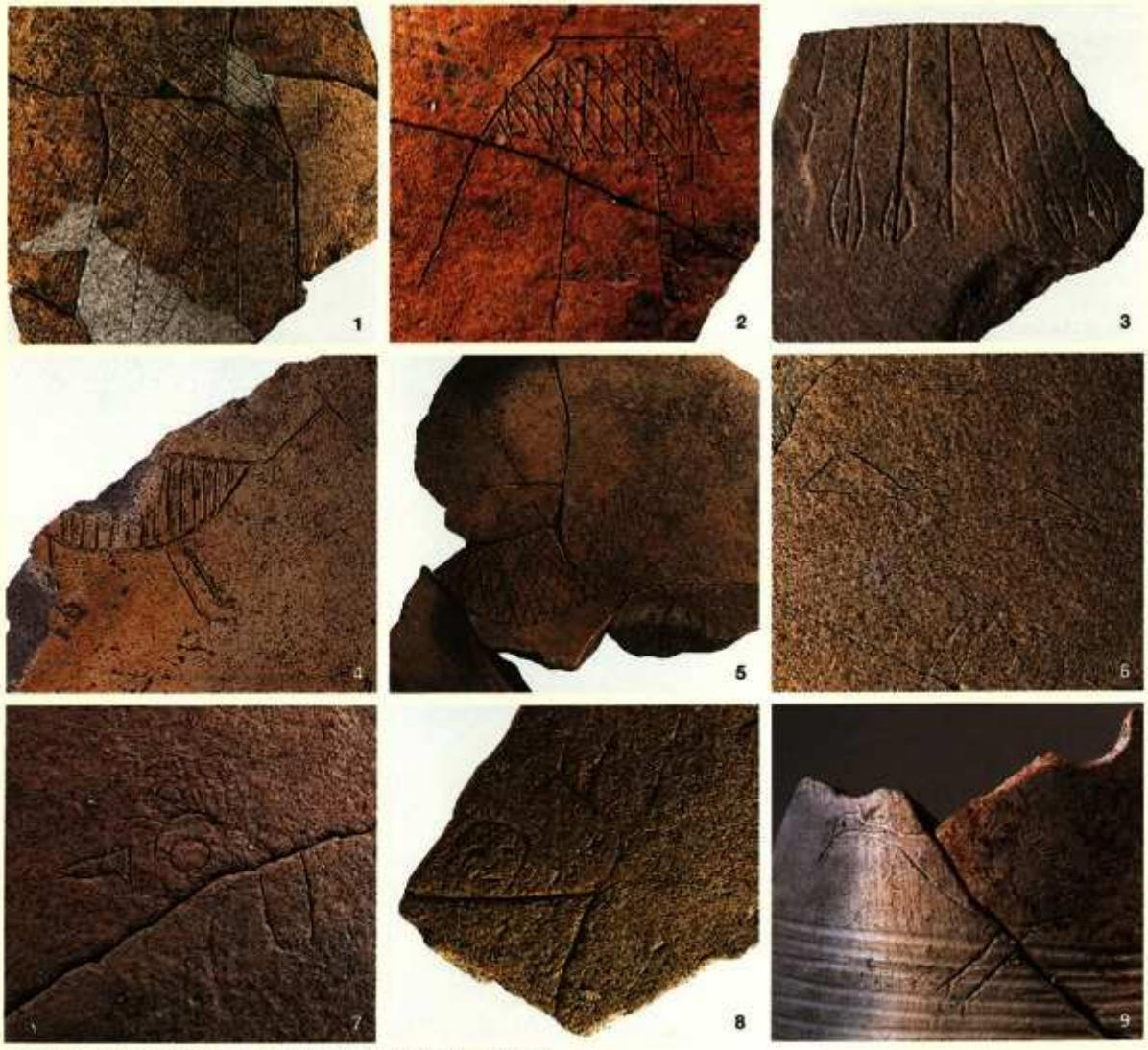
11-3　武器形木製品と手形石製品

11-4　銅鐸形土製品

絵画を描いた土器

唐古・鍵遺跡では、絵画を描いた土器が多量に出土する。また周辺の清水風、八尾九原遺跡を含めると、その数は全国の半数以上を占めている。絵画は弥生時代中期の短頸壺に描かれることが多く、画題には建物や人物・鹿・魚などがみられる。唐古・鍵遺跡の絵画は、均整がとれた形で表現力が豊かである。

11-5　絵画をめぐらせた壺



11-6　さまざまな絵画(1・2:高機織物、3:船の櫂、4・5:鹿、6:魚、7・8:人物、9:鳥)

記号をもつ土器

絵画土器の減少する弥生時代後期には、新たに記号をもつ土器が出現する。記号は直線や曲線によって構成され、長頸壺や広口壺に描かれることが多い。

これらの土器は、井戸から完全な形で出土することが多く、水に関連するまつりに使われたと考えられている。

11-7　さまざまな記号をもつ土器

11-8　さまざまな記号（1~3:直線の記号、4~6:曲線の記号、7~9:直線と曲線の組合わされた記号）

コラムV　まつりの風景

絵画土器の画題は、建物や人物・鹿・魚など特定のものが対象となっている。絵画土器の多くは破片となって出土するため、全体の構図がわかるものは少ないが、清水風遺跡の絵画土器には、大型建物や盾と戈を持つ人物・魚・矢負いの鹿がひとつの土器に描かれており、何らかの物語性が読み取れる。

特に鹿は『古事記』や『日本書紀』、『播磨国風土記』の記述から、古代には神聖視されていたことが知られ、絵画土器がまつりの場面で使われたものと考えられる。ここでは絵画土器に基づいて、まつりの風景を再現した。

11-9　盾と戈を持つ人物

11-10　大型建物の前で横笛吹をする風景

11-12　鳥装のシャーマンから種籾が配られる風景

11-11　手を挙げる鳥装のシャーマン

褐鉄鉱容器と勾玉

第80次調査において、区画溝から褐鉄鉱が出土した。この褐鉄鉱は中に粘土がつまっており、洗浄作業の結果、中からヒスイの勾玉や土器片が出土した。こうした状況から、褐鉄鉱にヒスイの勾玉を入れた後、土器片で蓋をしたものと考えられる。

褐鉄鉱は良質な粘土の周辺に、鉄分が凝結することで生成される。収縮した粘土が壁に当たり音を出すことから、「鳴石」・「鈴石」とも呼ばれ、江戸時代には好事家に珍重された。また中国では「太一（乙）余糧」・「禹余糧」と呼ばれ、薬として用いられた。

出土した褐鉄鉱容器は、中国の道教思想を反映するとの考えもあり、弥生時代の文化交流や精神世界を考えるうえで重要な資料である。

11-13　褐鉄鉱容器が出土した区画溝（第80次）

11-14　褐鉄鉱容器とヒスイ勾玉

11-16　ヒスイ勾玉の収納復元図

11-15　ヒスイ勾玉、土器片の収納状況とヒスイ勾玉

死者を葬る *Burial*

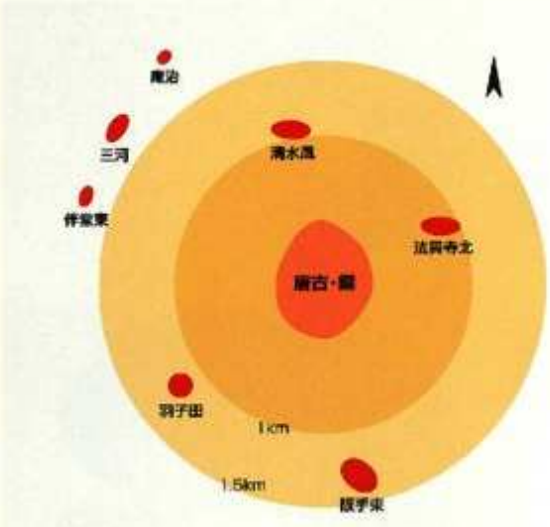
人の死を悼む気持ちは、今も昔も同じである。死者を丁寧に埋葬した例は、旧石器時代から知られている。唐古・鍵遺跡でも、乳児用の土器棺墓や、成人を埋葬した土壙墓や木棺墓が検出されている。

弥生時代前期には、ムラの縁辺部に木棺墓や方形周溝墓がみられるが、多重環濠の掘削された弥生時代中・後期には、周辺の清水風、法貴寺北、阪手東遺跡などで、方形周溝墓群が検出され、ムラの周辺に大規模な墓域を形成したと考えられる。

12-1　木棺墓(第23次)

12-3　墓に供えられた高坏(第33次)

12-2　土器棺墓(第50次)



12-4　唐古・鍵遺跡周辺の方形周溝墓

12-5　方形周溝墓(上:清水風第2次、下:阪手東第2次)

第Ⅱ部　田原本のあゆみ

原 始 *Prehistoric Age*

旧石器・縄文時代

田原本では、旧石器・縄文時代の様相について不明な点が多い。

しかし多遺跡では、縄文時代初頭に位置づけられる尖頭器が採集され、田原本の歴史は約1万年前まで、遡ることが判明した。また秦庄や矢部南、保津・宮古遺跡では、縄文時代後・晩期の遺物が検出され、この時期以降、遺跡が増加する。

13-1　多遺跡採集の尖頭器

13-2　秦庄遺跡出土の縄文土器

弥生時代

盆地中央部に位置する田原本では、弥生時代以降に本格的な集落が営まれる。拠点集落である唐古・鍵遺跡や多遺跡では環濠が掘削され、中期以降、周辺に衛星的な集落と墓域を形成することになる。

清水風遺跡や八尾九原遺跡では、掘立柱建物や井戸、絵画土器などが検出され、小規模な集落が営まれる。

また、唐古・鍵遺跡周辺の清水風、法貴寺北、阪手東遺跡、多遺跡の北西方の矢部南遺跡では方形周溝墓とそれに伴う供献土器が出土している。

13-3　方形周溝墓に供えられた弥生土器（矢部南遺跡）

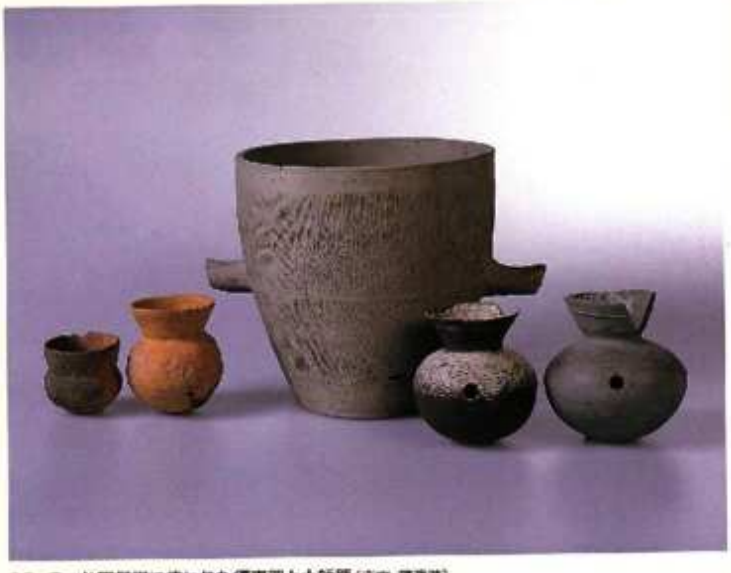
古墳時代

唐古・鍵遺跡は、弥生時代の大集落であるが、近年の調査によって、古墳時代前期まで集落が継続したことが明らかになった。また第72・84次では、古墳の存在が明らかとなり、埴輪などが出土している。

田原本では、その他にも黒田大塚・羽子田・笹鉾山古墳などが知られている。また唐古・鍵遺跡や笹鉾山古墳の調査では、墳丘を削平された小規模な古墳が検出され、低地部にはまだ多くの古墳が埋没していると考えられる。

13-4　笹鉾山古墳1号墳(左上)と2号墳(右下)

13-7　子持勾玉(唐古・鍵遺跡)



13-5　井戸祭祀に使われた須恵器と土師器(唐古・笠遺跡)

13-8　木製の農具(唐古・鍵遺跡)

13-6　祭祀に使われた赤串と滑石製模造品(保津・宮古遺跡)

古代 *Ancient Age*

古代には官道である中ツ道・下ツ道や、筋違道（太子道）、保津・阪手道などが整備され、こうした道の周辺に古社寺や遺跡が展開した。

内容の判明している遺跡は少ないが、保津・宮古遺跡や阪手北遺跡では、墨書土器や石帯具などが出土し、官衙的な性格をもつ遺跡と推定される。

14-1　筋違道の道路側溝（保津・宮古遺跡第14次）

14-2　須恵器の椀と墨書土器（保津・宮古遺跡、阪手北遺跡）

14-3　まつりに使われた人面墨書土器（保津・宮古遺跡）

14-4　石帯具（阪手北遺跡）

中 世 *Medieval Age*

中世には盆地内の荘園開発が進み、在地武士が台頭する。

『大乗院寺社雑事記』には「小阪」・「唐古」・「金剛寺」・「保津新」などの在地武士の名前が記録されている。これらの名前は現在は地名として残り、該当する遺跡を推定することが可能で、発掘調査では濠をもつ居館が検出されている。こうした居館の内部では井戸が見つかっており、中世の暮らしを示す日常雑器が多数出土している。

15-1　居館を囲む大濠（唐古・鍵遺跡第22次）

15-3　枡（唐古・鍵遺跡）

第26次調査の12世紀後半の井戸から出土した。枡の内側の一辺が16.3cm、高さ8.3cmを測り、およそ現在の1升2合入りの枡になる。現存する枡としては古いものである。

15-2　さまざまな生活用具（弥生・唐古遺跡）

陣屋の生活

1595年、平野権平長泰は田原本の南部五千石の領主となり、教行寺を誘致して寺内町を形成した。

つづく2代目の長勝は、教行寺を配転させて陣屋を造り、町の直接的な支配に当たった。また長勝は教行寺の跡地に、浄照寺・本誓寺を建立している。

これまで寺内町や陣屋跡の発掘調査が行われ、この時期には大規模な造成工事が行われたことがわかっている。

16-1　平野氏陣屋跡の大溝(第3次)

16-2　箱庭道具(平野氏陣屋跡)

16-3　遊びの道具(平野氏陣屋跡)

16-4　軒丸瓦(平野氏陣屋跡)

民間信仰

阪手カハウト遺跡は、地元の人たちから「瘡神(くさがみ)さん」と呼ばれ、近世から近代にかけて信仰の対象とされてきた。

1988年の発掘調査では、長軸7m・高さ1mのマウンドが検出され、マウンド上からは燈明を灯す瓦製の社(やしろ)や土師皿・「寛永通宝」などが出土した。またマウンドの下層では、中世の土壙墓(どこうぼ)や木棺墓が検出され、周辺の小字名(こあざめい)から中世寺院の存在が推定されている。

これは「八王子」を祀る野神信仰の一種と考えられ、多(おお)・矢部(やべ)・小阪・今里・蔵堂(くらどう)など田原本の各所には、「八王子」・「ハツオウさん」を祀る祠が残っている。

16-5　マウンドに散在する社形土製品(阪手カハウト遺跡第1次)

「瓦ヤ三輪町」

16-7　社形土製品に刻まれた文字

16-8　民間信仰のお供えもの(阪手カハウト遺跡)

埴輪の世界 *The World of Haniwa*

古墳の墳頂部や周囲には、土や木製の埴輪が並べられた。豪族の居館をかたどる家形埴輪や、首長の葬送の参列者を表した人物埴輪など、埴輪は当時の儀礼の一場面を再現したものと考えられる。また埴輪には、建築物や服装の細部を表現したものがみられ、当時の習俗を考えるうえでも興味深い。

17-1　蓋形埴輪（唐古・鍵4号墳）

17-2　家形埴輪（保津宮田古墳）

17-3　馬形埴輪と馬曳き人物埴輪（保渕山2号墳）

17-4　木製の埴輪（左：黒田大塚古墳、右：笠神山2号墳）

コラムVI　羽子田１号墳の牛形埴輪

明治30年、田原本町字東羽子田で病舎の建設に伴って、牛形埴輪や蓋形埴輪が出土した。このうち牛形埴輪は、全国的にも類例がみられず国の重要文化財に指定されている。

これらの埴輪は、長らく出土地点が不明であったが、1998年に発掘調査が行われ、前方後円墳の周濠から出土した可能性が高まった。また牛形埴輪に伴って七個体の盾持人埴輪が出土しており、他に類例をみない埴輪の構成となっている。

17-5　牛形埴輪（羽子田1号墳、重要文化財）

17-6　盾持人埴輪（羽子田1号墳）

17-7　円筒埴輪と朝顔形埴輪（羽子田5号墳）

よみがえる古代の技術 *Bachiru*

吉田文之（1915～2004）

漆工芸の名工として知られた父の吉田立斎氏と、二代にわたって撥鏤の復元に取り組み、正倉院に所蔵される尺などをもとに撥鏤の技法をよみがえらせた。こうした業績が認められ、1985年には人間国宝（重要無形文化財保持者）に認定された。

田原本町小室に在住し、活動を続けられていたが、2004年にご逝去された。

18-1　吉田文之氏

撥鏤（ばちる）

撥鏤とは彫法の一種で、「撥ね彫り」とも呼ばれる。文様は表面を紅・紺・緑色に染めた象牙を彫り、地色を彫り出すことによってできる。文様の一部に彩色を施した例もある。中国では唐代に流行し、日本でも正倉院に資料が所蔵されている。また『東大寺献物帳』には、「紅牙撥鏤尺」・「緑牙撥鏤尺」という記述がみられる。撥鏤の技法は、日本で継承されることはなかったが、吉田文之氏によって復元が試みられ、古代の技術がみごとによみがえった。

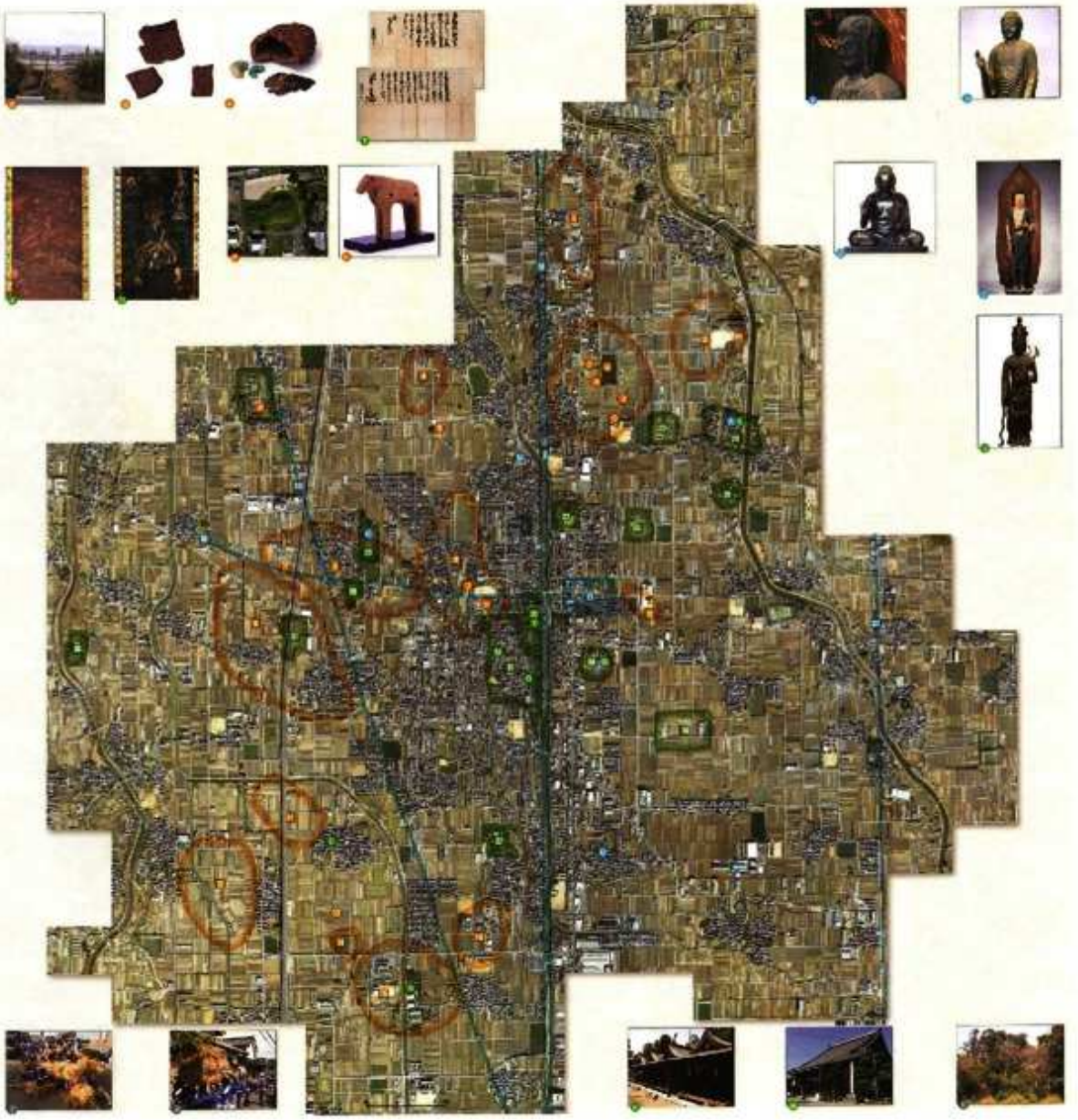
18-2　正倉院所蔵資料をもとに復元した作品（左：尺、右：碁子）

18-3　尺文鎮

18-4　菓子型香合

18-5　段隈を嵌め込んだ木製合子

田原本の歴史地図 *Historical Map*



指定文化財

□国指定

	所在地など	区分
◎木造不動明王立像	千面院	彫刻
◎木造阿弥陀如来立像（快慶作）	安倍寺	彫刻
◎木造観音菩薩坐像	百舌鳥耳原	彫刻
◎木造十一面観音立像	本光明寺	彫刻
◎絹本著色地蔵菩薩立像附厨子	宮古寺	絵画
◎唐古・鍵遺跡	田原本町ほか	史跡
◎大和郡山藺遺跡出土品	奈良県・奈良大学	考古資料
◎綾神社	田原本町	考古資料

□国 記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財

◎今里の綱引き
◎蔵の綱引き

□国 指定

	所在地など	区分
◎杉の巨樹	薬王寺八幡神社	天然記念物
◎村屋坐弥富都比売神社社叢		天然記念物
◎浄照寺本堂		建造物
◎春優形道祖神並古神社本殿		建造物
◎絹本著色釈迦三尊来迎図	薬王寺	絵画
◎阿弥大寺古墳		史跡

□町指定

◎「秋篠」が描かれた土器片	考古資料
◎道祖神石塔と供石群様（屋形）	考古資料
◎木造十一面観音立像 千面院	彫刻
◎平野殿平（屋敷）文書群	古文書

おもな道跡

奈良
- 横大路道跡
- 法貴寺北道跡
- 唐古・鍵道跡
- 唐古・鍵古墳群
- 八尾九郎道跡
- 黒田大塚古墳
- 笠神山古墳群
- 弥子田道跡
- 弥子田古墳群
- 阿波・宮古道跡
- 十八面・薬王寺道跡
- 田手原道跡
- 矢部道跡
- 唐城道跡
- 法貴山古墳群
- 矢部南道跡
- 多遺跡
- 唐座遺跡

石上
- 田手北道跡
- 下ツ道
- 鴨道跡
- 阿波・黒手道
- 中ツ道

中世・近世
- 黒田道跡
- 丹波山道跡
- 法貴寺道跡
- 其ノ庄道跡
- 小泉城本道跡
- 小泉城中道跡
- 笠神寺境記跡
- 笠神城東道跡
- 平野西浦集落跡
- 阿弥陀如来坐像
- 金剛寺道跡
- 寺内町道跡
- 田手仁王前道跡
- 田手カハウト道跡
- 秋ノ森道跡
- 薬師寺道跡

田原本の考古学年表 *Chronological Table*

			田原本の歴史	遺跡	唐古・鍵の歴史
原始	旧石器				
	縄文		田原本に人が住み始める。 縄文後期以降、遺跡が増加する。	多遺跡 秦庄遺跡 保津・宮古遺跡	
	弥生	前期	本格的な農耕集落が出現する。	多遺跡 保津・宮古遺跡	唐古・鍵遺跡が出現する。
		中期	唐古・鍵や多遺跡周辺に集落や 方形周溝墓が作られる。	清水風・八尾九原 阪手東遺跡 矢部南遺跡	唐古・鍵遺跡が大規模な集落となる。
		後期	小集落が展開する。	佐味遺跡 矢部遺跡	洪水による埋没後、環濠が掘り直される。
	古墳	前期		羽子田遺跡	唐古・鍵遺跡が縮小する。
		中期			集落がつくられる。
		後期	町内に古墳が築かれる。	黒田大塚古墳 笹鉾山古墳群 羽子田古墳群 団栗山古墳	弥生集落の上に、古墳が築かれる。
古代	飛鳥				
	奈良		中ッ道・下ッ道が整備される。 官衙的な施設が置かれる。	保津・宮古遺跡 阪手北遺跡 佐味遺跡	
	平安				庄園関係？の施設
中世	鎌倉		在地武士が台頭し、 環濠集落・居館が築かれる。	金剛寺遺跡 法貴寺遺跡 保津・宮古遺跡 小阪里中遺跡 十六面・薬王寺遺跡	唐古氏関係の居館がつくられる。
	室町				
近世	安土・桃山		1595 平野権平長泰が寺内町を形成する。	平野氏陣屋跡 寺内町遺跡 小阪里中遺跡 舞ノ庄遺跡 阪手カワウト遺跡	農耕地になる。
	江戸		1635～1648 2代目の長勝が陣屋をつくる。		唐古池・鍵池がつくられる。

展示資料一覧 *List of Exhibits*

遺跡の発見と発掘調査

末永博士遺愛のカメラ			勝部明生氏
唐古池の発掘調査報告書			
大型建物跡のケヤキ柱		74次	

唐古・鍵ムラの人々

よみがえった倭人	復顔模型		復元品
	頭骨	23次	複製品
	足跡　2点	40次	模型
倭人の アクセサリー	ヒスイ勾玉	91次	
	ヒスイ丸玉	59次	
	ガラス玉　16点	19次ほか	
	水晶丸玉　4点	37次ほか	
	泥岩管玉　4点	65次ほか	
	碧玉管玉　14点	14次ほか	
	イノシシ牙製垂飾品	20次	
	テン牙製垂飾品	37次	
	銅鏡	69次	
	木製の管	37次	
	竪櫛	37次	
弥生の人物表現	人形土製品　3点	61次ほか	

ムラをつくる

縄文晩期の土器	深鉢　2点	1・66次	
弥生前期の土器	壺	66次	
	甕	37次	
	鉢	19次	
環濠を掘る道具	組合せ鍬　2点	91次	
	一木鍬	91次	
環濠に 並べられた土器	広口壺ほか　7点	47次	
古環境	クマネズミ	37次	
	ハタネズミ	74次	
	ドブネズミ	19次	
	ムササビ	23次	
	ワシ・タカ	52次	
	ヘビ	33次	
	モグラ	33次	
	カエル	33次	
	テン	53次	
	フクロウ	13次	
	エノキ	22次	
	イチイガシ	22次	
	カワニナ	53次	
	マツカサガイ	53次	

弥生の食

米づくりの道具	平鍬　2点	40次	
	竪杵	37次	
稲穂を摘む道具	石庖丁　4点	59次	
	木製穂摘具	13次	
刈りとられた 稲束・籾殻と炭化米	穂束	33次	
	炭化籾・炭化米	20次	
植物を採集 ・調理する道具	石鏃　2点	58・69次	
	凹石　2点	33・74次	
	石臼	69次	
	磨石	33次	
	タタキ石　2点	69・91次	
雑穀を炊いた壺	広口壺	20次	
ムラで 飼われた動物	イヌ	20次	
	ニワトリ	18次	
栽培・採集された 植物	トチノミ	22次	
	クルミ	22次	
	ヤマブドウ	42次	
	モモ	37次	
	サンショウ	22次	
	ウリ	59次	
	マメ　2点	33・37次	
	ヒシ	37次	
	ヒョウタン	37次	
漁撈の道具	手網の木枠　2点	19・53次	
	やす	38次	
	石錘　2点	26・33次	
	土錘　3点	16次ほか	
	釣針　2点	37・65次	
食料とされた 魚介類	スッポン	22次	
	ウナギ	23次	
	アユ	23次	
	コイ	33次	
	ドジョウ	23次	
	シジミ	59次	
	マナマズ	37次	
	ギギ	22次	
狩猟の道具	弓	38次	
	弾	20次	
	石鏃　21点	13次ほか	
	骨鏃　2点	13・51次	
	石製投弾　7点	13次ほか	
	土製投弾　5点	20次	
食料とされた 動物骨	イノシシ	19次	
	タヌキ	37次	
	キツネ	23次	
	ウサギ	22次	
	サル	79次	
	ツグミ？	65次	
	ガン	19次	
	カモ類　2点	37・59次	
	キジ	20次	
	コハクチョウ	33次	
	コウノトリ	13次	

ゲート展示

高床建物絵画土器	絵画土器	1次	複製品 京都大学蔵
褐鉄鉱容器	褐鉄鉱容器	80次	
	ヒスイ勾玉　2点	80次	
	土器片	80次	

弥生の住まい

弥生の建物	梯子	54次	
	柱	65次	
	建物飾り	90次	
	壁材	53次	

	杉皮	38次
	窓枠状木製品	61次
井戸に供えられ土器	細頸壺	50次
	長頸壺	37次
	丹塗壺	5次
集水施設の土器枠	甕・壺	19次
住まいの道具	自在鉤	59次
	作業台	42次
	火鑽臼	13次
	小形臼	23次
	大形臼	69次
	竪杵	63次

土器をつくる

同一作者がつくった土器	甕・鉢	33次
	長頸壺 2点	3・33次
土器づくり道具	タタキ板	48次
製作痕跡を示す土器	木葉圧痕のある壺	69次
	輪積痕のある土器	48次
製作中のトラブル	失敗して捨てた土器片	19・20次
	イヌの噛み痕の土器片	20次
	ネズミの爪痕の土器 2点	33・51次
	粘土補修土器	19次
使用中のトラブル	被熱土器（壺）	20次
弥生土器の文様	斜突文（壺蓋）	26次
	綾杉文（壺）	96次
	鋸歯文（高坏）	13次
	山形文（高坏）	24次
弥生土器の用途と形	大形広口壺	53次
	器台	40次
	高坏	37次
	鉢	47次
	台付鉢	19次
	広口壺	37次
	細頸壺	19次
	水差形土器	22次
	甕	13次
壺形土器の変遷	広口壺（前期）	19次
	広口長頸壺（中期）	23次
	広口長頸壺（中期）	91次
	広口壺（中期）	50次
	広口壺（後期）	20次
	広口壺（後期）	14次
実験考古学	製作途中の土器（壺・底部）	
	完成した土器	
	タタキ板	
	擦切工具と原体の葉 2点	
	ヘラ状工具（ハケ用） 2点	
	棒状工具（ミガキ用）	
	鹿皮	
	直線文と波状文の描かれた大鉢	20次

木器をつくる

木を倒す道具	直柄・直柄未成品	20次ほか
	太型蛤刃石斧 4点	24次ほか
	両刃磨製石斧	33次
木を削る道具	膝柄	20次
	柱状片刃石斧 8点	22次ほか
	扁平片刃石斧 6点	20次ほか
	鹿角を利用した膝柄	74次
	鉄斧	40次
	鉄斧の柄	19次
	刀子の柄 2点	37・59次
	縦形剥ぎを転用した鑿	33次
	石小刀・柄	33・37次
	ヤリガンナ	74次
木製の食器	盌	79次
	鳥形容器	40次
	匙 2点	33・53次
さまざまな木製品	蓋付耳付高杯	13次
	蓋付四脚容器	3次
	流水文を刻んだ鉢	50次
	飾状木製品	13次
食器をつくる	横杓子（未成品）	26次
	縦杓子（未成品）	74次
	高杯（未成品）	33次
	無頸壺（未成品）	58次
鍬の製作工程	鍬（未成品） 4点	16次ほか
	鍬	19次
組合せ鋤の製作工程	組合せ鋤（未成品）3点	3次ほか
	組合せ鋤	86次
一木鋤の製作工程	一木鋤（未成品）2点	3・33次
	一木鋤	33次
鍬の泥除の製作工程	泥除（未成品）2点	19次
	泥除	13次
実験考古学	クヌギの原木	
	緑色輝岩 原石	
	太型蛤刃石斧	
	太型蛤刃石斧の柄	
	柱状片刃石斧の柄	
	柱状片刃石斧 3点	
	扁平片刃石斧 2点	
	青銅製の鑿 2点	
	青銅製のヤリガンナ	
	木屑	
	蓋付四脚容器	

青銅器をつくる

鋳造された製品	巴形銅器 2点	23次	1点複製復元品
	巴形銅器（復元品）		参考:23次関連
	銅鏃 9点	33次ほか	
	銅鏃（復元品）5点		参考:33・61次
	銅鋲 2点	69・90次	
	素文鏡	14次	
	有孔円盤	3次	
	銅鐸片	77次	
	ガラス製勾玉	3次	
	銅戈（復元品）		参考:弥生常設展
青銅器を磨く道具	砥石 5点	65次	
鋳造の原料	銅塊	65次	
	銅滓 2点	65次	
鋳造の熱で変形した土器	被熱土器 4点	61・65次	
	鉱滓が付着した取鍋	65次	
鋳造に使った道具	取鍋 5点	3次ほか	
	送風管 2点	40・61次	
さまざまな土製の鋳型外枠	武器の鋳型外枠 4点	61次ほか	1点複製復元品
	銅鐸の鋳型外枠 2点	47・61次	1点複製復元品
	鏡・銅?鋳型外枠2点	3・65次	

土製の銅鐸鋳型外枠	小型銅鐸鋳型外枠3点	3・61次	
	大型銅鐸鋳型外枠3点	47・61次	1点復製復元品
石製の銅鐸鋳型	石製鋳型　3点	3・65次	1点復製復元品
実験考古学	鋳型　A・B面		
	鋳放し銅鐸		
	粉真土		
	中真土		
	粗真土		
	送風管　2点		
	砥石　2点		
	ヘラ　3点		
	取瓶		
	金属片		
	実験で使った銅鐸(舌付き)		参考:高瀬川黒銅

さまざまな手仕事

籠を編む		骨製針　3点	19次ほか	
		木製針	23次	
		籠	66次	
莚を編む		横槌　2点	20・38次	
		編台	51次	
		木錘(小)　2点	13次	
		木錘(大)　2点	74・90次	
糸を撚る		紡錘車　6点	19次ほか	
		糸巻き	3次	
		骨製針　3点	37次	
	引き出し紡錘車	石製円板　5点	14次ほか	
		石製紡錘車未成品　5点	14次ほか	
		石製紡錘車　10点	38次ほか	
		土器片円板　5点	61次ほか	
		土器片紡錘車未成品　5点	19次ほか	
		土器片紡錘車　5点	13次ほか	
		土製紡錘車未成品	61次	
		土製紡錘車　4点	13次ほか	
布を織る		布巻具	13次	
		緯打具	13次	
		麻布	23次	
		布目圧痕土器(甕)	23次	
石を割る		サヌカイト原石	37次	
		サヌカイトのチップ	59次	
		鹿角のハンマー	20次	
		石核　2点	44次	
		石錐　2点	69・76次	
		スクレイパー	16次	
		石小刀　2点	65・69次	
		石鏃	37次	
	引き出し打製石器	石錐　4点	19次ほか	
		石核　4点	37次ほか	
		石鏃	89次	
		楔形石器　2点	79次	
		スリキリナイフ　2点	69次	
		打製石斧　3点	44次ほか	
		石小刀　2点	20次ほか	
		石剣　2点	25次	
		打製穂摘具	58次	
		スクレイパー　3点	20次ほか	
石を磨く		石庖丁　5点	22次ほか	1点完成品
		石を磨く砥石	53次	
		石錐　2点	20・37次	
	引き出し石庖丁製作	流紋岩　原石	52次	
		石庖丁未成品(流紋岩)4点	16次ほか	
		石庖丁(流紋岩)	61次	
	引き出し石庖丁	木製穂摘具	19次	
		打製穂摘具　2点	59次ほか	
		流紋岩石庖丁	38次	
		粘板岩石庖丁	33次	
		結晶片岩石庖丁　7点	19次ほか	
		大形石庖丁　2点	24次	
		ミニチュア石庖丁　2点	53次ほか	
	引き出しリサイクルされた石器	磨製石鏃(石庖丁転用)	69次	
		垂飾品(石庖丁転用)	79次	
		磨製鏃形石剣(石庖丁転用)	59次	
		石製紡錘車(石庖丁転用)3点	23次ほか	
		扁平片刃石斧(石庖丁転用)3点	13次ほか	
		扁平片刃石斧(柱状片刃石斧転用)	91次	
		扁平片刃石斧(磨製石剣転用)	89次	
		柱状片刃石斧(大型柱状片刃石斧転用)	91次	
		スリキリナイフ(石鏃転用)	82次	
		石錐(石鏃転用)2点	14・76次	
		タタキ石(大型柱状片刃石斧転用)2点	76・79次	
		凹石(磨石転用)	84次	
玉を磨く		玉の素材　3点	37次ほか	
		管玉　3点	53次ほか	1点未成品
		玉を磨く砥石　3点	13次ほか	
		紅簾片岩の原石	79次	
		擦切砥石　3点	19次ほか	
		ヒスイ丸玉	19次	
		ヒスイ勾玉	53次	
骨を磨く		加工痕のある鹿角	51次	
		把状鹿角製品	93次	
		骨鏃	13次	
		弭	93次	
		ヘラ状骨製品	13次	
		リング状骨製品	13次	
		シカの中手骨	20次	
		切断痕のある骨	23次	
		用途不明骨製品　2点	19次	
		骨針	53次	
		刺突具	61次	
		スリキリナイフ　2点	26・72次	
	引き出し骨角器	鹿角	37次	
		切断痕のある鹿角	20次	
		加工痕のある鹿角	74次	
		弭	37次	
		用途不明の骨製品	33次	
		ヘラ状鹿角製品	51次	
		シカの大腿骨	37次	
		シカの中手骨	63次	
		シカの中足骨　6点	19次ほか	
		縫い針　2点	37・84次	
		刺突具　2点	37・79次	
		骨針	51次	
		ヘラ状骨製品　2点	23・59次	
		肩甲骨	58次	
模型		籠を編む風景		
		莚を編む風景		
		石を割る風景		
		木を加工する風景		

交流と戦い

唐古・鍵ムラに運ばれたもの	吉備産の土器 2点	19・51次	
	摂津産の土器 2点	19・37次	
	河内産の土器 2点	19・37次	
	和泉産の土器	93次	
	和泉産のタコ壺	70次	
	紀伊産の土器 2点	33・77次	
	近江産の土器 2点	14次	
	尾張産の土器 2点	22・23次	
	信濃産の土器 3点	53次	
	阿島式土器	50次	
	伊賀産の土器	19次	
	三河産の土器 2点	23・53次	
	伊勢産の土器	53次	
ムラに運ばれた海産物	ハモ科	51次	
	サメ	47次	
	マイワシ	23次	
	タイ科	37次	
	エイ目	85次	
	クジラ	59次	
	パフンウニ	59次	
	ムラサキウニ	59次	
	アカニシ	20次	
	ヘナタリ	20次	
戦いの道具	木製の盾 2点	51・61次	
	石鏃 10点	14次ほか	
	磨製石鏃 2点	40・84次	
	柄入り石剣	13次	
	打製石剣 9点	13次	
	磨製石剣	37次	
	石戈の柄	93次	
	磨製石戈 2点	74・77次	
	環状石斧	53次	

まつりといのり

まつりの道具	銅鐸形土製品 4点	13次ほか	
	武器形木製品 3点	23次ほか	
	矛形石製品	13次	
	卜骨と広口壺	20次	
	異形高坏	13次	
	ミニチュア土器 6点	13次ほか	
	卜骨 2点	19・37次	
	刻みのある鹿角	24次	
	イノシシの下顎骨	37次	
	石棒	23次	
	独鈷石	22次	
	男根状木製品	3次	
	土製品 15点	11次ほか	
絵画を描いた土器	絵画土器 9点	3次ほか	3点複製品 天理参考館・京都大学蔵
記号をもつ土器	記号をもつ土器 9点	13次ほか	
土器に描かれた絵画	鳥の絵画土器	91次	
	楼閣の絵画土器	47・77次	
中央模型	まつりの風景		模型
	絵画土器から再現されたシャーマン 2点		模型
まつりの場で使われた絵画土器	絵画土器	22次ほか	
	絵画土器	清水風2次	上半:後藤復元品
引き出し	絵画土器 22点	3次ほか	

死者を葬る

土器棺墓	土器棺に転用した壺	50次	
墓に供えた土器	高坏	33次	

田原本のあゆみ

原始	尖頭器		多	表採
	縄文土器	1点	乗庄	橿原考古学研究所
		2点	矢部南2次	
	弥生土器 4点		矢部南2次	
	木製の腰掛		唐古・鍵59次	
	土師器 1点		唐古・鍵59次	
	須恵器 2点		唐古・鍵59次	
	子持勾玉		唐古・鍵38次	
	製塩土器		唐古・鍵59次	
	滑石製模造品12点		保津・宮古22次	
	斎串 3点		保津・宮古22次	
	須恵器 2点		保津・宮古22次	
古代	人面墨書土器2点		保津・宮古18次	
	和銅開称		笠形	表採
	墨書土器	2点	阪手北3次	
		1点	保津・宮古18次	
	石帯具		阪手北3次	
	円面硯		保津・宮古18次	
	土馬		清水風2次	
中世	桝		唐古・鍵26次	
	包丁		保津・宮古27次	
	鍬		保津・宮古27次	
	横櫛		保津・宮古27次	
	青磁		保津・宮古27次	
	片口鉢		保津・宮古27次	
	瓦器椀 4点		保津・宮古27次	
	土師皿 5点		保津・宮古27次	
近世	曲物		平野殿遺跡3次	
	軒丸瓦		平野殿遺跡3次	
	瓦質土製品 2点		平野殿遺跡3次	
	土製人形(牛)・(猿)		平野殿遺跡4次	
	土製人形(狐)		平野殿遺跡7次	
	泥メンコ 30点		寺内町8次	
	社形土製品 2点		阪手カハウト	
	花瓶 2点		阪手カハウト	
	染付碗		阪手カハウト	
	鉢 2点		阪手カハウト	
	小皿・土師皿 5点		阪手カハウト	
	銅銭 10点		阪手カハウト	
器の変遷	紀元前1世紀の鉢他		清水風2次他	19世紀までの土器 15点
埴輪の世界	盾持人埴輪 2点		羽子田1号墳	
	盾形木製品		笹鉾山2号墳	
	笠形木製品		黒田大塚古墳	
	家形埴輪		保津岩間古墳	
	蓋形埴輪		唐古・鍵4号墳	
	人物埴輪 2点		笹鉾山2号墳	
	馬形埴輪 2点		笹鉾山2号墳	
	円筒埴輪		羽子田5号墳	
	朝顔形埴輪		羽子田5号墳	
	牛形埴輪		羽子田1号墳	重要文化財
よみがえる古代の技術	尺文鎮			吉田文之氏所蔵
	巻子型香合			吉田文之氏所蔵
	合子			吉田文之氏所蔵

展示関係者一覧

■協力者（敬称略）

青木香津江　安部みき子　飯田隆一　井口喜晴　石野博信　今津節生　岩戸晶子　岩松敬三郎　上原真人　浦西　勉　江野朋子　大倉利予　大竹弘之　笠松雅弘
勝部明生　金原正明　金関　恕　亀井敏朗　加留勘次郎　河上邦彦　川部浩司　神田雅章　木村史明　桐山吉生　工楽善通　小泉武寛　黄　昭姫　小山田宏一
佐古和枝　佐藤利隆　佐藤　大　佐藤良二　徐　裕政　関川尚功　竹田政敬　辰巳和弘　谷　昭男　千賀　久　地村邦夫　塚本敏夫　辻本宗久　寺沢　薫
寺田和雄　戸田秀典　外山秀一　中島経夫　中原義史　難波洋三　西口陽一　仁科　章　橋本裕行　林部　均　馬場悠男　樋口隆康　藤原都代　松田真一
松藤和人　宮本長二郎　森　浩一　森田　稔　柳澤一宏　山田隆文　山田隆一　山中一郎　横澤　慈　吉田秋比古　吉田文之

■協力機関

逸翁美術館
大阪市立大学
大阪府立弥生文化博物館
香芝市二上山博物館
橿原市昆虫館
（株）住友商事
（株）凸版印刷
京都大学総合博物館
（財）元興寺文化財研究所
滋賀県立琵琶湖博物館
天理大学附属天理参考館
奈良県教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
奈良国立博物館
福井県立恐竜博物館
福井県立歴史博物館
（有）和鋼寛

■展示設計　東畑建築事務所

■展示施工　（株）乃村工藝社

■写真撮影　亀村俊二／熊谷武二／佐藤右文

■表紙デザイン　挿図グラフィック　（株）乃村工藝社／（株）ライブアド

唐古・鍵考古学ミュージアム

展示図録

発　行／田原本町教育委員会
〒636－0325　奈良県磯城郡田原本町926－1
唐古・鍵考古学ミュージアム
〒636－0247　奈良県磯城郡田原本町阪手233－1
TEL　0744－34－7100
発行日／平成16（2004）年11月24日　第1版
平成21（2009）年7月1日　第4版
印　刷／株式会社 明新社

唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM